

## 2024年度第19回石本賞選考結果報告

石本賞選考作業部会長  
柏端達也

石本賞は、石本新氏のご遺族の寄付金をもとにした事業の一環として2006年度に創設されました。当該年度から遡り過去3年間に『科学哲学』に掲載され、掲載決定時において40歳未満の著者による論文が、または科学哲学関連分野での博士の学位取得後8年未満の著者による論文のなかから優秀作1篇を選び、著者の研究活動を支援・奨励することを目的としています。

これまでの受賞作は以下のとおりです（副題は略させていただきます）。

- |      |        |  |
|------|--------|--|
| 第一回  | 青山 拓央  | 「時制的変化は定義可能か」                          |
| 第二回  | 三平 正明  | 「フレーゲ：論理の普遍性とメタ体系的観点」                  |
| 第三回  | 前田 高弘  | 「知覚経験の対象としての性質」                        |
| 第四回  | 大塚 淳   | 「結局、機能とは何だったのか」                        |
| 第五回  | 山田 圭一  | 「ウィトゲンシュタインの文脈主義」                      |
| 第六回  | 小草 泰   | 「知覚の志向説と選言説」                           |
| 第七回  | 佐金 武   | 「現在主義と時間の非対称性」                         |
| 第八回  | 大西 勇喜謙 | 「認識論的観点からの实在論論争」                       |
| 第九回  | 秋葉 剛史  | 「Truthmaker原理はなぜ制限されるべきか」              |
| 第十回  | 細川 雄一郎 | 「反事実条件文推論の動態論理による形式化」                  |
| 第十一回 | 北村 直彰  | 「存在論の方法としての Truthmaker 理論」             |
| 第十二回 | 榊原 英輔  | 「What Is Wrong with Interpretation Q?」 |
| 第十三回 | 鴻 浩介   | 「理由の内在于主義と外在主義」                        |
| 第十四回 | 李 太喜   | 「選択可能性と「自由論のドグマ」」                      |
| 第十五回 | 高谷 遼平  | 「主張内容を合成的に導く」                          |
| 第十六回 | 石田 知子  | 「「遺伝情報」はメタファーか」                        |
| 第十七回 | 飯川 遥   | 「規則のパラドックスに対する懐疑論的解決とは何だったのか」          |
| 第十八回 | 伊藤 遼   | 「初期ラッセルの存在論における世界の十全な記述可能性」            |

今年度の受賞作は55巻1号に掲載された次の論文に決定いたしました。

## 森田 紘平「くりこみ群におけるミニマルモデルに基づく局所的創発」

本受賞作は、創発とは何かという根本的な問いに答えを与えるという課題に果敢に取り組んだ論稿です。

「創発」は哲学の諸分野に登場する概念で、たとえば心の哲学においても飛び道具的に使われているのを目にします。科学や科学哲学の分野では、より基礎的で本質的な役割を担っているようにも見えます。森田氏は、受賞論文において、物理学をはじめとする科学の諸分野で用いられている創発の概念について、それをめぐる議論を丁寧に追い、その概念の適切な定義へ向けたあらたな道筋をつけることを試んでいます。先行する諸議論から森田氏が抽出するいくつかの論点はいずれもその意味と役割が明確に示されており、森田氏自身の提案する「創発」の定義に説得性を与えています。

現代まで続く創発をめぐる論争史は、森田氏の叙述するところによれば、アーネスト・ネーグルの「創発」と「還元」の定義を端緒とします。森田氏は、それに始まるさまざまな議論や提案を要点を絞って巧みに整理し、創発の定義という課題が一筋縄でいかないことを印象的に読者に提示します。

創発を論じるにあたっては、著者の示すとおり、多角的な観点、すなわち創発と還元の違い、それらのあいだの関係、創発の定義に用いられる概念の正確な内実、科学分野における事例との適合性……等々を考慮する必要があります。それらの観点を適切に考慮しないと、創発の事例とは言いがたいものが「創発」と定義されたり、創発の事例とみなすべきものが定義から溢れてしまったりします（「還元」に関しても同様です）。

これまでに提案されてきたアイデアの一つ一つを森田氏は検討し、それぞれの難点を指摘しつつ、慎重に、創発の新しい定義への方向性を描き出します。その定義は、ジョシュア・ロザリアによる還元の定義を一つの足がかりとしているように見えます。すなわち、ロザリアの局所的還元のアイデアに呼応する「局所的創発」を森田氏は考えます。創発を理論のあいだの関係ではなくモデルのあいだの関係と捉える点も、還元に対するロザリアの考え方と軌を一にしています。ただし森田氏は、局所的創発を単なる局所的還元の失敗（否定）として定義することはしません。そのような定義の仕方は「創発」と「還元」を例において相互排他的にしてしまうからです。それは諸科学における事例と合致しないと森田氏は言います。

そこで注目されるのがいわゆるくりこみ群のもつ創発性です。森田氏は、ロバート・バターマンらによるくりこみ群のモデルの特徴づけ——「ミニマルモデル」としての特徴づけ——を援用しつつ、局所的創発の適切な定義を

考案します。ミニマルモデルは、詳細が省略されたいわば不正確なモデルでありながら、より低いレベルの正確なモデルがもたない説明力を持ちます(ときに「詳細が現象の理解を妨げる」わけです)。それは新奇性を説明します。ここにおいて著者はタイトルに示唆された新定義へと到達します。

本論文は一見すると科学哲学の非常に専門的なテーマを扱ったものだと思われるかもしれませんが、もちろんそれで十分ですし、実際、本論文はその意味で高い専門性の水準を備えています。ただ他方で、本論文は、本誌読者全員の興味を幅広く喚起しうる内容と、明快で開かれた記述様式を併せもって、その点もまた好意的に評価された部分です。

選考手順と経過の概要を以下に記します。第一次選考が8月初めの編集委員会において行なわれました。そこで、

清水右郷「トランスサイエンス概念をつくりなおす」

(自由応募論文：54巻1号(2021)掲載)

小川亮「哲学の一般的方法としての「最良の説明への推論」」

(自由応募論文：55巻1号(2022)掲載)

森田紘平「くりこみ群におけるミニマルモデルに基づく局所的創発」

(自由応募論文：55巻1号(2022)掲載)

高取正大「分析形而上学と経験科学の連続主義に対する批判的検討」

(若手研究助成成果報告書：56巻1号(2023)掲載)

千葉将希「Teleological Fictionalism in Biology」

(自由応募論文：56巻2号(2023)掲載)

の5篇が石本賞の授賞候補論文に決まりました。

それを受けて、編集委員長を部会長とする選考作業部会を発足し、8月の下旬から11月上旬にかけて、第二次選考と最終選考を行ないました。第二次選考で複数の委員から推薦された論文は3篇でしたが、今年度は、そのなかで森田論文に明白に高い評価が集まりました。推薦の数だけでなくコメントにおいても森田論文を上位に位置づける意見が少なくありませんでした(他の候補論文に低い評価があったという意味ではありません)。以上の結果を最終選考において確認し、意見交換を経て、本作業部会は全会一致で森田論文を2024年度の石本賞授賞論文とすることとしました。

なお、今年度の選考作業部会委員は、大塚淳、柏端達也(部会長)、齋藤浩文、鈴木生郎、原田雅樹(五十音順)の5名でした。